病院図書館　2010;30(4):198-199

35周年企画　部会活動

研修部のあゆみ
—2001年からの10年間—

林　伴子

Ⅰ．はじめに

研修部は研修会・勉強会の開催を行うことによって、近畿病院図書室協議会の目的のひとつである教育啓蒙活動を担ってきた。今回「病院図書館」発刊30周年を機に、2001年からのあゆみを振り返ってみることにした。

Ⅱ．研修会開催

研修部では、原則として研修会を年2回、総会と同時開催の事例・研究報告会を年1回、その他に勉強会を年2〜3回開催してきた。研修会は大まかな年間計画を立ててはいるが、開催日程や場所の選定、講師の都合などによって当初の計画通りに行かない場合も多く、内容の決定に苦慮することもある。しかし、実際に行ってきた研修会の内容としては、その時のニーズに応えられたのではと自負している。

テーマとしては、病院図書館でもIT化が進みインターネットの利用が当たり前になってきたことから、電子媒体に関するものが目立つ。特に文献検索については、担当者のスキルアップのためだけではなく、利用者教育のための知識習得を目指した研修も行ってきた。講義だけではなく実習を伴った研修が多く、日常利用する環境にないデータベースも体験できたことは貴重な経験となった。Web版のデータベースではバージョンアップに対応した知識が必要で、今後もこの分野での研修は必須であろう。

また、情報ネットワークや病院図書館の連携に関するものも複数回取り上げ、身近ではあるが、普段あまり意識せずに過ごしている著作権についての研修も行った。

日常業務、特に管理面に関するものは情報ネットワーク関係以外では事例・研究報告会による実践報告止まりとなっている。

他には、以前より行っている「病院業務の基礎知識」「医学用語の基礎知識」を深めた。病院には多職種が勤務しているため、看護師や薬剤師、臨床工学技士を講師に招いた。このことは、業務の内容と共に利用者としての声も聞くことができ、また図書館員として利用者に対する研究支援についても考えることができた。

1997年〜1999年、2002年〜2004年には毎夏ワークショップとして一泊二日の研修会を開催した。グループディスカッションから発表にいたるまで、プレゼンテーションの一面も発揮することができ有意義な研修会ではあったが、2日間にわたる研修会は参加しづらいとの声もあり、その後開催していない。

Ⅲ．勉強会

研修会が終日開催であるのに対し、勉強会は半日、ないし夜間の開催である。毎年必ず行っているのは新任向けの勉強会で、これはこの10年間変わっていない。内容は近畿病院図書室協議会の活動について、基本業務、資料の相互利用などである。参加者対象は新規入会施設の担当者、既会員施設の新任担当者である。参加者数は年によって変動があるが、研修部員が講師を務めることにより参加者の疑問質問にも応え

はやし　ともこ：社会保険神戸中央病院　図書室

ることができ、おおむね好評である。

また、インターネットの利用できる会場でのパソコン研修などでは、夜間開催にもかかわらず多数の参加者を数えたこともあった。

他には本の補修講習会も行った。なかなか補修作業を行う時間が無いのが実状ではあるが、簡単な補修なら行えることを知り、実務でも役立つものとなっている。

Ⅳ. 共催シンポジウム

近畿地区医学図書館協議会、日本薬学図書館協議会近畿・中国・四国地区協議会との共催シンポジウムを7回開催した。毎回当協議会からは実行委員を派遣して協力している。2004年には「病院図書室協議会創立30周年記念フォーラム」として当協議会が中心となって開催した。近年、当日の会場管理のみの協力に止まることも多いが、毎回当協議会からの参加者は多く、大学図書館との交流の場となっている。

Ⅴ. おわりに

病院を取り巻く状況は年々厳しさを増し、病院図書室も予算面、人員配置などでの制約が増えてきているように思える。またIT環境の整備が進むにつれ、利用者が直接文献情報を入手できるような状況もできつつある。しかし、このような時にこそ図書館員の専門性が問われるのではないだろうか。データベースや電子ジャーナルなどの情報を、つねに利用者に提供できるよう、利用者の一歩前を行くという気概を持って業務にあたることこそが、図書館員のひとつの姿ではないかと考える。そのためにも研修活動は必須であり、研修部としては今利用者にとって何が必要であるかを見極め、それに応えられるような企画力が試されている。理想としては年間計画並びに長期短期にわたる担当者のスキルアップを目指した研修プログラムの樹立が考えられるが、残念ながら実状ではなかなか実現は困難である。しかし、少しでも担当者のスキルアップに繋がる研修会の開催を目指したい。